

古代日本神話に見られる異文化衝突現象分析 その5

——天孫降臨までの経緯を中心に

梁 継国

はじめに

日本古代神話における重要な一節として、天孫降臨の話がある。非常にポピュラーで誰にもよく知られているものであるが、日本神道の真髄、もしくは古代日本という国の体制等を宗教的、政治的な角度から考えるときに、大王への系譜、国作りという偉業の完遂、その国を支配する神の存在の正統性を語るのに不可欠な内容になっているのである。しかし、その天孫降臨までには、さまざまな交渉、戦いがあったことも古事記に詳細に記載されている。その部分に触れるたびに、なぜ天孫が地上に降臨しなければならなかったのか、どうして、天からの使者は地上に来ると、みな自分の本来の使命を忘れ、天に報告、復命さえせずに地上に定住してしまったのか、そしてまた、その天孫降臨の実現が戦争、流血を伴った根本的な理由は一体、なんであったのか、というような疑問が脳裏に浮かんでくるのである。結論を先に言うと、それは古代日本における中国文化を取り入れる際に生じた異文化衝突現象そのものであると私は思う。本論文では、その天孫降臨の全過程を考察して、避けられなかったその異文化衝突現象を分析し、天孫降臨の真相を突き止めてみようとしたものである。

一. 地上の国における天孫降臨までの状況

ハヤスサノオノミコト（速須佐之男命）が天高原から出雲の国に追い出されたのは、天からの神が始めて地上に降臨したことを意味する。このハヤスサノオノミコトは、地上の女性、クシナダヒメ（櫛名田比売）を娶り、宮殿を造り、子孫をふやし、国作りの偉業を始めた。ハヤスサノオノミコトの第七代目の子孫、オオクニヌシの神（大国主神）の誕生まで、すでに誕生した自然の神、例えば、山の神、海の神など以外に、国土を治める神霊の神（八島土奴美神）、稲の実りの神（大年神）、稲の魂の神（宇迦之御魂神）、水源の神（深淵之水夜礼花神）、大水を司る神（淤美豆奴神）、衣類を豊かにする神（天之冬神）など国の運営上に実に役立つ神々が生まれたのである。それらによって、国というのは抽象的な概念より、非常に具体化され、組織化されてきたのである。オオクニヌシの神の代になると、その兄弟だけでも80人もおり、兔、蛇、百足、蜂、鼠、虱などの動物や樹木などの植物も現れた。神の姿についても、髪の毛、皮膚などに関する表現が見られた。また、家庭生活に関しては、正妻のような表現があり、衣替えをするように、何人でも妻を持つことが出来るようになった。さらに病気の治療

法、送別のための酒飲みなどの記載も見られ、実に豊多彩な生活が楽しめるような人間社会が形成されたのである。そのオオクニヌシの神の子孫も十代まで記録され、非常な繁栄振りである¹。国の繁栄、発展とともに、その管轄部門も区分化され、運営上も煩雑になりつつあるため、さすがのオオクニヌシの神も「吾独何能得作此国」²（私一人では、どうやってこの国を作っていくのであろうか）と憂いはじめた。つまり、国作りは順調に行われてはいるものの、1人だけではとても管轄しきれず、ほかの神からの協力が必要になるほどの規模になったのである。ほかの神の協力こそが、もしかすると、天孫降臨による大地制覇をする最も直接で、理由らしい理由になったのではないかとの疑問を抱いたことはあるが、実際はまったく違ったものである。

二. 地上への使者派遣の目的

アマテラス大御神が自分の子（子孫）を地上に派遣する理由は、ほかでもなく、その地上の国はわが子が支配すべき国だからということである。

天照大御神之命以、豊葦原之千秋長五百秋之水穂國者、我御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命之所知國、言因賜而、天降也。³

（訳：アマテラス大御神が、「豊葦原の千秋長五百秋の水穂の国は、わたしの御子アメノオシホミミノミコト（天忍穗耳命）に治められる国である。」と言って、その子に天から降りなさいと命じたのである。）⁴

当たり前だと言えば、そうかも知れないが、何の理由もなく、いきなり、そういわれても、唐突の感じはするであろう。それを釈明するような、古事記の記述が続く。

於是、天忍穗耳命、於天浮橋多多志而詔之、豊葦原之千秋長五百秋之水穂國者、伊多久佐夜藝弓有那理、告而、更還上請于天照大神⁵。

（訳：それで、アメノオシホミミノミコトは、天の浮き橋に立ち、地上を見下ろして、「その豊葦原の千秋長五百秋の水穂の国は、ひどく騒いでいるのが聞こえる」と言って、アマテラス大御神に申し上げた。）

1 青木和夫等校註「日本思想大系Ⅰ 古事記」岩波書店 1989年7月14日 第8刷発行 54～78頁

2 上掲『日本思想大系Ⅰ 古事記』78頁

3 上掲『日本思想大系Ⅰ 古事記』80頁

4 訳文は筆者によるものである。以下同様

5 上掲『日本思想大系Ⅰ 古事記』82頁

しかし、この「ひどく騒いでいる」ことが、征伐の理由になることは出来ないと思われる。問題はこのことをどう解釈するかによる。そこで、アマテラス大御神が、諸神を召集して話した言葉に注目してみよう。

「此葦原中国者、我御子之所知国、言依所賜之国也。故、以爲於此国道速振荒振國神等之多在。是使何神而將言趣」⁶

(訳：この葦原の中つ国は、わたしの御子が治める国であり、すでに任せた国である。ところで、この国には、靈力を威勢よく活かしている荒々しい地上の神たちが大勢いるようで、どなたかの神を派遣して、わたしの趣旨を説明し、彼らを説得してもらえないか)

つまり、前提としては、その国はわが御子が治める国である。そして、今のところ、地上の神たちによって支配されているのである。わたしの命令を伝え、服従するように説得してくれ、と言うような強制的な命令である。しかし、よく考えてみれば、なぜ地上の国は自分の御子が治める国でなければならないのか、非常に唐突過ぎる感じがするものである。前述したように、地上の国の最初の支配者は、他人ではなく、アマテラス大御神の弟、ハヤスサノオノミコトであった。このハヤスサノオノミコトであるが、親のイザナギの権力配分に対する不満により、大暴れをして、アマテラス大御神に天から追放され、地上に追い出されたのである⁷。このハヤスサノオノミコト及び十数代にわたるその子孫たちが、国作りを本命として、弛まざる努力を経て、大きな発展、繁栄振りを見せ、国作りの偉業を成し遂げてきた。そのことを「此國道速振荒振國神等之多在」と決め付けること自身が不自然というよりも、事実を歪曲しているのではないかと思われる。はっきりいえば、それは、自分の御子のその国に対する支配を正当化するための口実に過ぎない。根本的には、やはり地上の国の支配権をめぐる権力闘争の一環である。これこそ、後に行われる天孫降臨の本質ではないかとわたしは考える。

どの国のどの時代、どの王朝・政権でも、権力闘争は随時存在するものである。どの権力闘争も、政権を自分の手に入れたいと言うごく単純で共通する当たり前の目的を持っている。この地上の国——豊葦原の千秋長五百秋の水穂の国を支配したいアマテラス大御神の目的も例外ではない。しかし、その単純な目的の裏には、異文化受容をめぐる必死の戦いが潜んでいるのであり、当時の中国文化という外来文化を導入するに当たって、日本固有の伝統文化との間に発生した衝突、摩擦が隠されているのである。その戦い、衝突、摩擦は、ハヤスサノオノミコトが大暴れをして、天から地上に追放されたあの大事件に遡ることが出来る。

そもそも、ハヤスサノオノミコトが大暴れをした根本的な原因であるが、古事記の記述で

6 上掲『日本思想大系Ⅰ 古事記』82頁

7 梁継国「日本古代神話に見られる異文化衝突現象分析 その2スサノオノミコトのコンプレックス分析を中心に」に参照。茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』第4号 161~173頁 2008年3月

は、母親のイザナミに会いたくて、父親のイザナギから割り当てられた海原の管轄に赴任せず、毎日泣いてばかりいて、イザナギに叱られて、大暴れをしたといわれているが、実際ではそうではない⁸。周知のように、ハヤスサノオノミコトは、イザナギが妻のイザナミと決別してから、穢れを落とそうとして、体を清める際に、鼻を洗って生まれたものである⁹。単性性殖の産物であり、母親の存在すら知らなかった。母親に会いたくて泣いていたのは、うそ泣きであり、父親のイザナギの権力配分に対する不満を表す口実であるとしか考えられない。イザナミと分かれた後、三貴子を得て喜んでいたイザナギは、その三柱の神に領地と権力の配分をした。アマテラス大御神は太陽神として、高天原——天上を支配する。月読神は日に配して夜の食国を管轄する。ハヤスサノオノミコトは、天下＝地上——海原を治める。三番目の子供として、ハヤスサノオノミコトは、父親の命令通り、喜んで赴任に行くはずであったが、激しく反抗したのであった。理由としては以下のように考えられる。

スサノオノミコトは、その名前から見ても、古事記に記載されているその描写から見ても男性であることは間違いがない。彼の前に生まれたアマテラス大御神は、通説では女性であり、その装飾品の御頸珠之珠などから見ても女性であろうと思われる。ツクヨミノミコトについては、その記述があまり見られないため、性別は不詳といってもよいが、アマテラス大御神の場合は、近年、男性であると主張する説もあるようであるが¹⁰、さほど有力ではなさそうで、通説としての女性説には筆者も賛同する。すると、当時の女性優位の日本母系社会の伝統に挑戦し、男性として、自分の権利を要求し、父親のイザナギに決められた兄弟姉妹の役割分担に対して、不満を示し、大暴れまでしてしまったこのスサノオノミコトの行動は、日本伝統文化とは非常に異質的なものであることは言わざるを得ない。つまり、中国伝統文化における男性の重みから言えば、スサノオノミコトの抗争は、凄まじい異文化衝突の意味を持つことになるのではなかろうか。

スサノオノミコトは、最終的には、万の神々の激怒により、仕方がなく、地上に追放され、父親のイザナギの命令通り、海原の管轄をし、国作りの偉業に着手したのである。前述したように、十数代の努力により、国の繁栄と発展をもたらしたわけである。しかし、地上が不毛の地のときには、スサノオノミコトを追放して、その国作りに行かせたが、いったん、国作りの偉業が完遂されると、「此葦原中国者、我御子之所知国、言依所賜之国也。」と言って、自分の子孫を派遣して、それを支配させようとしたアマテラス大御神の考えは、どうも筋が通らない。根拠になるようなものも古事記の記述からは一つも見当たらない。外来文化の代表者という言い方は不適切であるかもしれないが、日本の伝統文化に違反していると思われたスサノオ

8 梁継国「日本古代神話に見られる異文化衝突現象分析 その2スサノオノミコトのコンプレックス分析を中心に」に参照。茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』第4号 161~173頁 2008年3月

9 上掲『日本思想大系I 古事記』40頁

10 「別冊國文学NO16」（學燈社）日本神話総覧、鳥居札『天照大神男神論』フォレスト出版 2005年5月等に参照。

ノミコト並びにその子孫の手から、強権を駆使して、無理やりに奪おうとしたものであると言っても過言ではなからう。とにかく、外来文化を制御しようとした目的は、明らかであると思われる。ひどく騒いでいて、無秩序状態であると言うのは、ただの口実としか考えられない。その後、地上にいるひどく騒いでいる神々を説得するため、数度にわたり、使者を派遣したが、それほどの効果はなかったようである。

三、その使者たちの行方

1. 三年不復奏の天菩比神

八百万の神々と相談した結果、最初に派遣されたのは天菩比神（アメノホヒの神）であった。

尔、思金神及八百萬神、議白之、天菩比神、是可遣。故、遣天菩比神者、乃媚附大國主神、至于三年不復奏。¹¹

（訳：それで、思慮深い神 思金神および八百万の神々が相談した結果、アメノホヒの神を派遣されれば良いと提案したため、そのアメノホヒの神を派遣した。しかしそのアメノホヒの神はオオクニヌシの神に媚付いて、三年間たっても天に戻って報告してこなかった。）

「媚附大國主神」は三年間たっても戻らない理由らしいが、詳細の記述はされていない。しかし、その「媚附大國主神」という言い方には、オオクニヌシの神の魅力は、その点から言っても派遣されてきたアメノホヒの神にとっては、少なくとも天上の神、極端に言えば、アマテラス大御神よりは大きいといえよう。もう一つは、地上に降りてから、天にいるときよりも重要視され、気持ちよく生活、仕事が出来からだとも考えられる。さらに推測すれば、外来文化を受け入れた地上の国に魅了されたと言っても過言ではなからう。

当然、地上に派遣されて三年経っても天に戻って報告しないアメノホヒの神を放任するわけには行かない。そのために、天若日子をまた派遣したのである。

2. 八年不復奏の天若日子（アメノワカヒコ）

ところで、この天若日子が派遣された後の行動は、もっと失望的で、八年も戻らないだけでなく、オオクニヌシの神の愛娘 下照比売と結婚までしたのである。

是以、高御産巢日神・天照大御神、亦問諸神等、所遣葦原中国之天菩比神、久不復奏。亦、使何神之吉。尔、思金神答白、可遣天津国玉神之子、天若日子。故尔、以天之麻迦古弓・天之波波矢、賜天若日子而遣。於是天若日子、降到其国即、娶大國主神之女、下照比

11 上掲『日本思想大系 I 古事記』82頁

売、亦慮獲其国、至于八年不復奏。¹²

(訳：そこで、タカミムスヒの神とアマテラス大御神は、また神たちを召集してたずねた。「葦原の中つ国に派遣したアメノホヒの神が、長い間、戻って報告もしていないから、またどの神を遣わしたらよいか」。思金神は、「アマツクニタマの神の子、アメノワカヒコを派遣すればよろしいでしょう」と答えた。それで、アマノマカコ弓とアマノハハの矢を、アメノワカヒコに持たせて、派遣した。しかし、アマノワカヒコが葦原の中つ国に降り付くと、すぐにオオクニヌシの神の娘 シタテルヒメと結婚した。またその国を自分のものにしようとして、八年も戻らず、報告をしなかった。)

見て分かるように、このアメノワカヒコは、アメノホヒの神よりもひどいもので、オオクニヌシの神の娘と結婚し、その地上の国に定住するばかりでなく、その国を自分のものにしようとも考えたのである。徹底的に天の意志——アマテラス大御神の意志を裏切ったのである。しかし、オオクニヌシの神の娘との結婚という行動、天下を取ろうとした考えは、まず、オオクニヌシの神に気に入られることが必要条件である。それがなければ、そのオオクニヌシの神のお婿さんにはなれない。そして、お婿さんになった以上、もう家族の一員であるから、天下をとり、その国を自分のものにしようという考えは、ある意味で、地上の神、具体的に言えば、オオクニヌシの神への協力であり、オオクニヌシの神の後継ぎになるとも考えられる。冒頭にも記述したように、国の発展とともに、さすがのオオクニヌシの神も「吾独何能得作此国」と嘆いている頃であるから、そういうような可能性は十分にあると思われる。

ところで、このアメノワカヒコの天への裏切りはその程度に止まらず、さらにエスカレートし、天を敵に回し、天からの使者「鳴女」という雉の鳥まで射殺したのである。

故尔、天照大御神・高御産巢日神、亦問諸神等、天若日子、久不復奏。又遣曷神以問天若日子之淹留所由。於是、諸神及思金神、答白、可遣雉名鳴女時、詔之、汝行問天若日子状者、汝所以使葦原中国者、言趣和其国之荒振神等之者也。何至于八年不復奏。

故尔、鳴女、自天降到、居天若日子之門湯津楓上而、言委曲如天神之詔命。尔、天佐具売、聞此鳥言而、語天若日子言、此鳥者、其鳴音甚惡。故、可射殺、云進即、天若日子、持天神所賜天之波士弓・天之加久矢、射殺其雉。¹³

(訳：アマテラス大御神とタカミムスヒの神が、またみんなの神たちに訊ね、またどなたかの神を遣わして、アメノワカヒコが戻って報告しない理由を聞きに行かせたらよいのかと言った。神たちとオモイカネガミは、ナキメという雉を派遣すれば良いと答えた。それで、ナキメを呼んで、君が地上の国に行つて、アメノワカヒコに、葦原の中つ国に派遣して、その国のあらぶる神たちを説得し、従わせるためだったのに、どうして八年経っても戻つてこ

12 上掲『日本思想大系 I 古事記』82頁

13 上掲『日本思想大系 I 古事記』84頁

ないし、報告もしなかったのかと聞きなさい。

そのナキメが天から地上に降りついて、アメノワカヒコの家の方のところにある清らかな桂の木に止まって、言われたとおりに聞いた。しかしそれを聞いたアメノサクメという地上にいる女性の神は、アマワカヒコに、なんと汚くて不吉な鳴き声なのか。こいつを射殺しなさいと言った。すると、アメノワカヒコすぐさまに、天からいただいたアマノハジ弓とアメノカグ矢を使って、その雉を射殺した。)

ついに流血事件にまで発展したわけである。このアメノワカヒコがナキメという雉を射殺した理由としては、アメノサクメという地上にいる女性の神からの「其鳴音甚悪」との一言を聞いたことしかあげられない。いくら不潔で汚い声と言っても、そのナキメは天またはアマテラス大御神から派遣されてきた使者であり、それに伝えられているのは、アマテラス大御神の命令である。そのナキメを射殺したのは、アマテラス大御神を代表とした天の神々を敵に回したとしか理解出来ない。すると、このアメノワカヒコは、完全に地上の神々と一緒になり、地上の神々に同化されたものになる。このようなアメノワカヒコが天の神々から許されるはずはなかろう。

四. 天若日子の悲惨な結末

結論から言わせると、このアメノワカヒコは、タカムスヒの神に殺された。すなわち自分が自ら天の神からもらったアマノハハの矢に刺されたのである。

尔、其矢、自雉胸通而、逆射上、逮坐天安河之河原、天照大御神・高木神之御所。是高木神者、高御産巢日神之别名。故、高木神、取其矢见者、血箸其矢羽。於是、高木神告之、此矢者、所赐天若日子之矢、即示诸神等詔者、或天若日子、不誤命、爲射恶神之矢之至者、不中天若日子。或有耶心者、天若日子、於此矢麻賀禮。云而、取其矢、自其矢穴衝返下者、中天若日子寝朝床之高胸坂以死。¹⁴

(訳：その矢が雉の胸を通過して、天に向かって逆上し、天の安の河の川原にいるアマテラス大御神とタカギの神(タカムスヒノカミのこと)のところに届いた。タカギの神がその羽に血が付いている矢を取ってみて、これはアメノワカヒコに与えた矢ですよとアマテラス大御神に告げた。と同時にほかの神たちにも見せて、もしアメノワカヒコが命令通りに地上の悪い神を射たとしたならば、この矢を戻してもアメノワカヒコには当たらないはず。もし彼が邪心を持っているならば、この矢で、わざわざあれと言って、その矢を、地上から射こまれたときに出来た穴から落とし返した。その矢が朝寝をしているところのアメノワカヒコの

14 上掲『日本思想大系 I 古事記』84頁

高い胸に当たり、アメノワカヒコが即死した。)

その文脈から考えられることは二つあると思う。まず、アメノワカヒコの死は、天に神、具体的にはタカギノカミ（タカムスヒノカミ）に殺されたのではなく、自分が邪心を持ったため、害に遭遇したのである。また、その矢は地上から射こまれたときに出来た穴を通して戻ったもので、自らアメノワカヒコに当たったのである。とにかく、アマテラス大御神を代表とする天の神が、自分の仲間、あるいは部下を殺したのではなく、自分で害に遭遇して死んだのであり、邪心を持ったため、死んでも罪人同様、同情には当たらないというような印象を与えたのである。確かに地上に行って、そこの首領の娘と結婚し、さらにその後継者にもなろうとしていることから見れば、罪深いものとしか見えない。しかし、そうするならば、はっきりとこいつを殺してやるぞと言えよのには、いかなかったのは、一種の暗殺の手法としか思われないうであろう。

それどころだけではなく、地上の国に溶け込んで、天に帰らなかったアメノワカヒコが死んだ後、その喪屋までつぶされ、葬式も出来なかったのである。

故、天若日子之妻、下照比売之哭声、与風響到天。於是、在天、天若日子之父、天津国玉神及其妻子聞而、降來、哭悲、乃於其处作喪屋而……。此時、阿遲志貴高日子根神到而、弔天若日子之喪時、自天降到、天若日子之父亦其妻皆哭云、我子者不死有邪理。我君者不死坐邪理云、取懸手足而哭悲也。其過所以者、此二柱神之容姿、甚能相似。故、是以過也。於是、阿遲志貴高日子根神、大怒曰、我者愛友故弔來耳。何吾比穢死人云而、拔所御佩之十掬劍、切伏其喪屋、以足蹴離遣。¹⁵

(訳：亡くなったアメノワカヒコの妻シタテルヒメが悲しくて慟哭し、その泣き声が風に乗って天に届いた。天にいるアメノワカヒコの父親、アマシクニタマノカミおよび、アメノワカヒコの妻や子供もそれを聞いて、天から降りてきて悲しく泣き喚いた。そして葬式を行うための喪屋をも作った……そこへ、天からアヂシキタカヒコネの神という神がアメノワカヒコの不幸をお悔やみにやってきた。その神を見て、アメノワカヒコの父および妻が、わが子が死なずにいた。わが夫が死なずにいたと言って、その神の手足に取りすがってさらに泣き喚いた。そう間違えたのはその二柱の神の顔が非常に似ているからだ。アヂシキタカヒコネの神が大いに怒って私がいとおしい友人を弔問しに来たのだ。どうして、私を汚らわしい死人になぞらえたのだと言った。そしてとつか剣を抜き出して、その喪屋をきり壊し、足で蹴って遠くへ行った。)

非常に酷い話である。似ているから間違えられるのは良くありそうな話であろうが、友人の喪屋をきり壊した上に足で蹴飛ばしたりするまではしないと思う。それを壊すために、わざわざ、天から派遣されたのではないかとさえ疑われる。そうであるとすれば、アメノワカヒコと

15 上掲『日本思想大系 I 古事記』86頁

似ているのはただの口実になる。アマテラス大御神を中心とした天之神々の、裏切り者としてのアメノワカヒコに対する恨みがどれほど深いかは窺えるであろう。そして、アメノワカヒコを殺し、その葬式を行うための喪屋まで壊したことによって、地上の国を占領する、アマテラス大御神の策略が新展開を見せ始めたのである。

五. 国譲りの真相

アメノワカヒコという裏切り者を処罰し終えると、アマテラス大御神はすぐさま地上に強兵を出した。タケミカツチの神（建御雷之男神）という非常に強くて、戦闘に長けている神である。それに、アメノトリフネの神（天鳥船神）という空中を鳥のように飛べる船の神を補佐役としてつけたのである¹⁶。

この二柱の神が地上に降りてオオクニヌシの神を説得というよりは、さまざまの手を使って、服従させたのである。

是以、此二神、降到出雲国伊那佐之小浜而、拔十掬劔、逆刺立于浪穂、趺坐其劔前、問其大国主神言、天照大御神・高木神之命以、問使之。汝之宇志波祁流。葦原中国者、我御子之所知国、言依賜。故汝心奈何。尔、答白之、僕者不得白。我子八重言代主神、是可白。然、爲鳥遊・取魚而往御大之前、未還來。故尔、遣天鳥船神、徵來八重事代主神而、問賜之時、語其父大神言、恐之。此國者、立奉天神之御子、即蹈傾其船而、天逆手矣、於青柴垣打成而隱也。¹⁷

（訳：そこで、この二柱の神が出雲の国のイザサの小浜に降りた。そのタケミカツチの神がトツカの劔を抜き出して、逆さまに波がしらに刺したて、その劔の前に足を組んで座り、オオクニヌシの神にたずねて、アマテラス大御神とタカギの神のご命令に従い、たずねに使いに来たものだ。そなたが支配している葦原の中つ国は、私の御子が治める国とお任せになった。それで、そなたの心はどうだと言った。それに対して、オオクニヌシの神は、私は何も申し上げられない。わが子ヤエシロヌシの神は答えられるのだ。しかし、彼は鳥遊びや、魚取りなどをするためミホノサキに行つてまだ帰つてこないのだと答えた。それで、タケミカツチの神がすぐさまに、アマトリフネの神を遣わして、ヤエシロヌシの神を呼んできて、その場でたずねた。ヤエシロヌシの神は、父親のオオクニヌシの神に、それは、大変おそろしいことだ。この国はやはり天上の神の御子に差し上げましようといつて、足で船を踏み傾けて、天の逆手を打つて、青葉のついた垣に打ちなして自分の姿を隠した。）

16 上掲『日本思想大系 I 古事記』88頁

17 上掲『日本思想大系 I 古事記』90頁

タケミカツチの神の横柄な態度、服従しなければ、殺してやるぞというように匂わせた脅迫の一端が窺える。これに対して、オオクニヌシの神は、戦々恐々して、自らは明白に答えずに、その息子に答えさせるという牛歩戦術を取ったのである。ところがその息子のヤエシロヌシの神は、怖くてすぐに降伏し、あわてて逃げたのである。とてもあてにならなかった。それでもオオクニヌシの神は、そんなに簡単には国譲りはしなかった。

故尔、問其大国主神、今汝子事代主神如此白訖。亦有可白子乎。於是、亦白之、亦我子有建御名方神。除此者無也。如此白之間、其建御名方神、千引石擊手末而來言、誰來我国而、忍忍如此物言。然欲爲力競。故、我先欲取其御手。故、令取其御手者、即取成立氷、亦取成劔刃。故尔、懼而退居。尔、欲取其建御名方神之手、乞歸而取者、如取若葦、搯批而投離者、即逃去。故、追往而、迫到科野国之洲羽海、將殺時、建御名方神白、恐、莫殺我。除此地者、不行他處。亦、不違我父大国主神之命。不違八重事代主神之言。此葦原中国者、隨天神御子之命獻¹⁸。

(訳：それで、タケミカツチの神が、また、オオクニヌシの神に聞いた。今息子さんのヤエトシロヌシの神がそうだったが、ほかに話をすべき子がいるのか。オオクニヌシの神はまた言った。私にはまた、タケミナカタの神という子供がいるが、それ以外にはもういない。こう話をしている間に、そのタケミナカタの神がやってきた。彼は千引きの石を手の先に軽々しく載せて歩きながら、いったい誰だ。私の国に来て、こそこそと話をしているのは。勝負しようぜ。先にそなたの手を出して握らせてみようといった。それを聞いて、タカミカツチの神が、自分の手をタケミナカタの神に差し伸べて握らせたら、その手は忽ち氷柱になり、また剣の刃になったりした。タケミナカタの神は怖くなり、下がった。そこで、タケミカツチの神が、タケミナカタの神の手を逆にとろうとした。タケミナカタの神の手がつかまされると、柔らかい葦のようになった。それをつかみつぶして投げはなすと、タカミナカタの神はすぐに逃げ去っていった。そこで、タケミカツチの神がタカミナカタの神を科野国の州羽の海まで追いついて、殺そうとしたときに、タカミナカタの神は、恐れ多い。私を殺さないでください。私はもうここ以外、どこにも行かない。また、父親のオオクニヌシの神の話や、ヤエトシロヌシの神の話には背かないから、この葦原の中つ国は、天上の神の御子の命令通り、差し上げますといった。)

もう一人の息子、タカミナカタの神も結局、相手にならず負けてしまって、降参したのである。でなければ、殺されるから、賢明な選択をしたといわざるを得ない。さすがのオオクニヌシの神は、二人の息子がみな天上からの神、タケミカツチの神の重圧と強い力に耐えられず、負けてしまったことに対しても、挽回するすべなしに、服従しか出来なかった。しかし、それでも、タケミカツチの神の質問に、条件を付けることを忘れなかったのである。

18 上掲『日本思想大系 I 古事記』92頁

故、更且還來問其大國主神、汝子等事代主神・建御名方神二神者、隨天神御子之命勿違白
 訖。故、汝心奈何。尔、答白之、僕子等二神隨白、僕之不違。此葦原中国者。隨命既獻也。
 唯僕住所者、如天神御子之天津日繼所知之登陀流。天之御巢而、於底津石根宮柱布斗斯理、
 於高天原氷木多迦斯理而、治賜者僕者於百不足八十垆手隱而侍。亦、僕子等、百八十神者、
 即八重事代主神、爲神之御尾前而仕奉者、違神者非也……故、建御雷神返參上復奏言向
 和平葦原中国之状。¹⁹

(訳:それで、タケミカヅチの神がまた戻ってオオクニヌシの神に訊ねて、そなたの子ら、
 コトシロヌシの神とタケミナカタの神はみな天上の神の御子に背かないと言ったが、そなた
 はどう思うかと聞いた。オオクニヌシの神は、子供らの申し上げたように、私も背かない。
 この葦原の中つ国は、お言葉通り、献上いたします。ただし、私の住むところだけは、天上
 の神の御子の天つ日繼が治める富足りた天の宮殿みたいに、地下の岩に柱をしっかりと立て、
 高天原に千木を高くかかげて作ってくだされば、私は、一番辺鄙なところで身を隠して、お
 仕えするが、私の子供、即ち、ヤエコトシロヌシの神、および地上にいる百八十の神々は、
 天の神のお仕えさせていただきたい。そむくものはいないからです。と頼んだわけである
 ……それで、タケミカヅチの神が、天上に戻り、葦原の中つ国を平定した旨の報告をし
 た。)

それで、国作りの偉業を完遂したオオクニヌシの神は、自らの手でそれを天上の神に差し上
 げることになったとはいえ、引退する自分の老後の居場所をちゃんと確保したともいえよう。
 そこでふと中国の蘇州、杭州、上海などの地方にある庭園を思い出すが、その大半はみな相当
 高い地位に上った官僚が引退するときに作ったものばかりである。オオクニヌシの神のやり方
 も結局は、古代から現代までの中国における引退高官のそれと、さほど変わらないことに驚き
 を禁じえない。ただし、大きな流血もせず、地上の神々の命を守ることが出来て、自分の老後
 もちゃんと保障してもらえたことは、賢明な選択と言えよう。

最後に

以上のように、古事記に記載されている天孫降臨までに発生したさまざまな交渉、戦いの各
 場面を顧みて、自分なりの考えを述べてきたが、見て分かるように、まず、天孫降臨というの
 は、天上の神が地上の国に対する無条件で理由なしの占領であると思われる。地上の神々がひ
 どく騒いでいるとかの表現はあったものの、別に悪いことをしているわけでもあるまいし、天
 上の神に不利益をもたらしたわけでもあるまい。唯それは自分の御子が支配すべき国との一言

19 上掲『日本思想大系 I 古事記』92～94頁

で発生した事件であるため、その一言を発したアマテラス大御神の絶対的な権威が伺える。それは日本という国を支配する正統な思想として考える場合、不可欠なことであると思われる。それぐらいの権威がなければ、正統な思想にはなれないであろう。また、アメノワカヒコのような天からの使者は地上に来ると、みな自分の本来の使命を忘れ、天への報告・復命さえせずに地上に定住してしまったことから見て、地上の生活に溶け込み、地上の女性を愛するようになったことは、今まで未経験で、まったく斬新な文化が好きになったとも理解できると思う。その文化はスサノオノミコトからオオクニヌシの神までの間に作り上げられたものであるが、前述したように、当時の外来文化＝中国大陸文化からの影響を大いに受け、または、その要素が多く存在しているものであり、アマテラス大御神を代表とした天高原のものとは完全に異質な存在でもある。それも天からの使者たちに魅了された一番根本的な理由ではないかと言える。それを制覇し、自国の文化に利用可能なものにするのも、天皇を中心とした中央集権国家の建設には欠かせないことであろう。その意味から考えて、天孫降臨の事件自身は、古代日本における中国文化を取り入れる際に生じた異文化衝突現象そのものであると、最後に私は考えたい。

参考文献

- 直木 孝次郎著『神話と歴史』 吉川弘文館 2006年5月20日
上田 正昭編『古事記の新研究』 学生社 2006年7月25日
平川 南等編『文字と古代日本5 文字表現の獲得』 吉川弘文館 2006年2月20日
小島 憲之著『万葉以前—上代びとの表現』 岩波書店 1986年9月1日
長瀬 治著『古代語研究』 桜風社 昭和62年3月20日